

わたしの聖戦

◎◎女性が働くということ◎◎61

医学ジャーナリスト 医学博士 植田美津江

蜘蛛と暮らす日々

はじめてその蜘蛛を見たのはいつのことだったろう。

掃除機をかけた後、室内の鉢植えに水をあげたり、何気ないそんな日常で目にする、とても小さな黒っぽい蜘蛛である。地方によって色々あるそうだが、昔「朝の蜘蛛は縁起がいいが、夜の蜘蛛は悪いことの前触れ」と聞かされた私にとって、蜘蛛は一種のジんクスのような存在である。この言い伝えは、朝の掃除を推奨するために作られたもので、意味はないらしいのだが、幼い頃に聞いた話というのは、本当に根深く覚えているものである。

我が家は、ひとり暮らしにしては少々広い構造にある。一日誰とも話をせず会いもせず、音楽もテレビもつけず過ごすことがままある。仕事から帰ってきたときには、誰もいない真つ暗な部屋に向かつてドアを開き、靴を脱ぐ。そんなときにふとその蜘蛛に出くわすことがある。静かな空間でリラックスしていたものが、突然の人間の気配にじっと息を凝らして体を硬くする様子が伝わってくる。虫やら昆虫にはめっぽう弱い私、はじめは、ドッキリしたが、あまりに小さいし、害があるわけでもなし。で、ときどきその蜘蛛に話しかけた

りするようになった。何せ他に誰もいないのだから仕方ない。「ただいま」「まだいたの?」「何食べてるの?」と、声をかけてやればやるほど、相手は余計緊張するかのよう。放つといて、という感じである。

「熱射病による死」――、そんな言葉が頭をよぎった瞬間、むっくりと頭を持ち上げ、こわばったように手足を動かし始めた。蘇生である。じっと見つめられていれば気詰まりだろうと、気を利かせたつもりで知らん顔をして



靴を脱ぐ。
そんなときに……

今年の夏はひどく暑かった。しばらくぶりに家に帰ってきたところ、くだんの蜘蛛がほとんどひからびた状態でへたっている。いかにも暑さに耐えかねたという風であった。水を数滴ピピッとかけてやっても動かない。

おいた。数分経ってみてみると、すでにそこにはいない。水で元気を取り戻し、また家の中を徘徊しはじめたのだらう。良かったのだらう。良かったに嬉しく、話しかけるようになったのはそれからである。

寂しい思いを味わう自分が可笑しかった。蜘蛛には、糸で巣を張る手足の長い女郎蜘蛛や、毒を持つセアカゴケグモなど見るもおぞましい蜘蛛が多く存在する。人間には蜘蛛が嫌いなタイプと蛇のほうを嫌というタイプに大別される、とも聞く。私と同居している蜘蛛の種類は何なのかよくわからないが、少なくとも糸は吐かないし、毒もないだらう。むしろ他の虫を食べてくれるのではないかと期待もしている。また、蜘蛛は女性に身を変え、男性を惑わすというイメージもあるが、そんな神秘的な要素もなさそうである。ペットというには大仰だが、少なくともこの家に住む私以外動物ではある。まさか蜘蛛に慰められるとは思ひもしなかつたが、それもまた楽しと思う今日この頃である。

イラスト・三浦義雄